

E.M. フォースター『ハワーズ・エンド』における
電信の諸相

島 田 協 子

Aspects of Telegraphy in E.M. Forster's *Howards End*

Kyoko SHIMADA

群馬県立女子大学紀要 第44号 別刷

2023年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 44

FEBRUARY 2023

JAPAN

E.M. フォースター『ハワーズ・エンド』における 電信の諸相

島 田 協 子

Aspects of Telegraphy in E.M. Forster's *Howards End*

Kyoko SHIMADA

1. はじめに

E.M. フォースター (E.M. Forster) の長篇小説『ハワーズ・エンド』 (*Howards End*, 1910) では、物語の序盤において、行き違いと勘違いによる一騒動が持ち上がる。事の発端は、ヘレン・シュレーゲル (Helen Schlegel) が、知人ウィルコックス (Wilcox) 夫妻の家「ハワーズ・エンド」を訪問中、ロンドンにいる姉のマーガレット (Margaret) に送った手紙であった。

I do not know what you will say. Paul and I are in love—the younger son who only came here Wednesday. (5)¹

(あなたが何て言うかは分からない。ポールと私は愛し合っているの—水曜に来たばかりの次男さんです。)

この手紙は翌日届き、姉マーガレットとお婆のジュリー・マント (Juley Munt) は、ヘレンの突然の宣言に驚く。二人はポールについては全く知らず、状況が分からないマーガレットはヘレンが心配で傍にいてやりたいと考えるが、弟ティビー (Tibby) が病気で寝込んでいるため動けない。代わりにマント夫人が様子を見に行くことになるが、キングス・クロス駅でお婆を見送ったマーガレットが帰宅すると、ヘレンからポールとの仲が終わったとの電報 (“All over. Wish I had never written. Tell no one” 11) が届いていた。

ヘレンの電報を知らぬまま出発したマント夫人が、ハワーズ・エンドの最寄り駅で偶然出会ったウィルコックス家の長男チャールズ (Charles) を弟ポールと勘違いしヘレンとのことを持ち出したことから、二人の恋愛を知ったチャールズが怒り、マント夫人と大喧嘩になる。二人が険悪な状態でハワーズ・エンドに着くと、チャールズらの母ルース (Ruth) が現れ、ごく自然な手際で騒動を鎮めるのだった。

行き違いと勘違いが重なって起きたこの騒動で、電報は、その「行き違い」を際立たせるのに一役買っている。ヘレンは気持ちがい舞い上がり姉に手紙を書いたものの、翌朝には冷静になり、ポールの感情も一時的なものだったことが判る。ヘレンは手紙の内容を取り消すために急いで電報を送ろうとするが、そのためには遠い駅前の郵便局まで行かねばならない。ポールが自動車で行こうと

1 以下、『ハワーズ・エンド』からの引用には、特に断りのない場合すべて Abinger Edition のテキストを用いる。なお、日本語訳は筆者による。

するが、家族に事情を隠して出かけるのに手間取り、結局電報は遅きに失することになった。

本作では、登場人物がしばしば電報を利用している。多くは家族や友人間で日常的に使われ、電報によって訪問や打合せが適切に行なわれる場合もあるが、他方、必ずしも人々が結びつき理解し合うのに役立つわけではない。上記の行き違いのエピソードのように、電報が円滑な情報伝達に役立つ場合もある。また、電報が互いの心情を伝えるには不十分と見なされたり、更には互いの意図を隠す手段として使われたりもする。このように、『ハワーズ・エンド』では電報が登場人物同士の関係を描く上で多様な役割を果たしている。

『ハワーズ・エンド』は、異なる生活圏、文化圏に属する三つの家族が交差し、20世紀初頭の大英帝国を背景としたイギリス社会が持つ様々な側面をあぶり出している。教養と財産に恵まれたマーガレット・シュレーゲルとヘレン姉妹の生活を中心に、裕福な実業家のヘンリー (Henry)・ウィルコックスとその家族、貧しい社員で美と教養に憧れるレナード・バスト (Leonard Bast) とその妻ジャッキー (Jacky) らが関わる中で、経済的・文化的格差や「男性的なもの」と女性的なもの」(武田 193) の対立、彼らがそれぞれ体現する価値観の対立—「散文と情熱、眼に見えるものと見えないもの、実用的な精神と知的な精神、外側の生活と内側の生活」(“the prose and the passion, the seen and the unseen, the practical mind and the intellectual, the outer life and the inner” Stallybrass x) が示される。物語序盤の騒動は、それまで異なる生活圏にいたウィルコックス家とシュレーゲル家の人々が、ハワーズ・エンドが縁となって関わる年月の幕開けとなるものだった。エピグラフ “Only connect . . .” が示すように異質なものを「結びつける」ことへの関心が多くを占める本作で、コミュニケーションの手段である電報のイメージが頻出し、さらには、それらが時に人々を「結びつける」ことができずネガティブな働きをすることは注目に値する。

さらに個々のエピソードは、具体的な場所の描写や、イギリスにおける地理上の位置などと共に描かれる。絶え間なく変貌するロンドンの諸地域や、郊外化の進む地方、あるいは変化のまだ及ばない田園の風景は、登場人物の眼を通してだけでなく、時に語り手の俯瞰によって、その地勢や気候、変貌の様子が活写され、物語と一体化している。このようにハワーズ・エンドとロンドンだけでなく複数の「場所」が登場し、その背後に「大英帝国」の存在もたえず言及されている本作において、グローバルな通信手段である電報への言及は、むしろ交通への言及以上に遍在している。開発をまだ辛うじて免れている静かな田舎家のハワーズ・エンドと目まぐるしく変化し続ける大都市ロンドンとの対比、当時のイギリスの郊外化の状況、都市開発の問題、その背後にある帝国主義やイングリッシュネスの問題と関連づけて本作が論じられる際には、ハワーズ・エンドへ向かう交通手段である鉄道や(普及し始めたばかりの)自動車との関わりなどが取り上げられてきた。²しかし、交通と同様に本作の舞台を支え、さらに本作の主題とも関連する電報の存在も、同様に重視されるべきであろう。

『ハワーズ・エンド』と同時期に書かれたフォースターの短編小説「機械が止まる」(“The Machine Stops” 1909) において、非接触型のコミュニケーションのみに依存する人々が描かれていることは示唆的である。この未来小説では人間たちは皆、テレビ電話を思わせる通信機器によって絶えず世界中の人々と交信しているが、各人がそれぞれの住居に孤立して暮らし、他者と直接顔を合わせたり、相手の身体に触れたりすることを避けている。すなわち「機械が止まる」は、発達した通信ネットワークの中でむしろ人々が互いに隔離し孤立するという皮肉な状況を、極端な形で示して見せている。翌年刊行された『ハワーズ・エンド』での電信のネガティブイメージにもこうし

2 Jameson、大石ならびに河野を参照。

た危機感が映し出されていると考えられる。だが、この短編が執筆されていた1908年の日記でフォースターが、「魂と肉体」との共通の敵は「機械」であると述べているように (Stallybrass)、*「機械が止まる」*では、人間関係の変化と通信手段との関わりは、もっぱら人間対機械という図式に集約されているのに対し、『ハワーズ・エンド』におけるそれは、より広範かつ複雑な形で取り上げられており、電報の普及も負の役割のみを担っているわけではない。

本稿では『ハワーズ・エンド』に現れる電報が作中で果たす役割と、そのイメージの拡がりを論じる。まずは本作の電報への言及の多さに20世紀初頭の電信網の普及が映し出されていることを確認したうえで、作中において電報が人間関係に対しネガティブに働く場面を分析する。次いで、異質なものを「結びつける」役割を担うものとして電信と対置される、マーガレットとルース、ハワーズ・エンド邸との関係に注目し、そこに、見えない“transmission” (伝達／継承) として電信のイメージが反復されていることを指摘する。さらに、そうした“transmission”を巡る描写に見られる戦いの表現に注目し、ハワーズ・エンド継承を描く物語の特質を明らかにしたい。

2. 電報の普及

『ハワーズ・エンド』の登場人物たちはしばしば電信 (電報) を利用する。本作において電報を意味する名詞および電報を送ることを意味する動詞の使用数は、telegraphが4、telegram18、wire (動詞「電報を送る」) 4、cable (名詞「海外電報」または動詞「海外電報を打つ」) 3、cablegram (海外電報) 1であり、フォースターの他の長篇小説と比べてもこれら電信関係の単語の使用回数と種類の多さは際立っている。

ケンブリッジ大学キングス・コレッジ所蔵のフォースターの自筆草稿を、現行の活字版と比較した *The Manuscripts of Howards End* によると、上記の電信関係の言及のほとんどは草稿において当初から存在している。さらに、ヘレンが、ポールとの仲が終わったことを姉に電報で知らせようとした時のことを回想する第4章の台詞の中では、草稿の代名詞 it が現行版で名詞“telegram”に置き換えられている所が2箇所あり (Stallybrass 24)、“telegram”という語がより強調される方向で修正されていることが分かる。この直後の会話ではマーガレットが、ヘレンとポールの恋愛事件が引き起こした騒動を振り返って“all these telegrams and anger”と要約しており、前述の“it”から“telegram”への修正は、このフレーズへの伏線となっているとも考えられる。この「電報と怒り」というフレーズは、若い男女の恋愛事件で人々が右往左往し、コミュニケーションがうまくとれずに衝突が起きたことを象徴するものと解釈できるが、このフレーズは作中であと4回使われ、少しずつ意味を深化させていく。5つめの“telegrams and anger”は結末近くに現れ、草稿での“interviews and diplomacy”から書き換えられている (Stallybrass 342)。ここでも“telegram”の語が、出版に際して更に増やされたことになる。³

これらの電報への言及の多さは、本作が背景とする20世紀初頭までの電信網の普及を前提にしていると言えよう。⁴ 電信機は1830年代後半にイギリスではクック (William Fothergill Cooke) とホイットストーン (Charles Wheatstone)、アメリカではモース (Samuel Finley Breese Morse) によつ

3 現行版にはいくつかの版があり、それぞれテキストの異同があるが (Stallybrass 356-370)、これら電信に言及した箇所については、どの版においても違いはない。

4 『ハワーズ・エンド』の舞台は、作中で言及される普仏戦争やポーア戦争からの経過年数、大英帝国を巡る国際情勢や国内における婦人参政権運動、登場人物たちの生活ぶりなどから、執筆時期 (1908-1910) とほぼ同時期に設定されていると考えられる。

てそれぞれ開発が進められた。折からの鉄道敷設とともに、ブリテン島、北米大陸、ヨーロッパ諸国において電信網がはりめぐらされ、さらには英仏海峡、大西洋を初めとする各所への海底ケーブルの敷設によって1890年代までにはインドやアフリカとも結びつけられた (Wenzlhuemer 115)。そうしたグローバルな通信網は“Victorian Internet”とすら呼ばれる。⁵更に20世紀初頭までには世界のほとんどの地域が電信ネットワークの中にあり、どの地域とも、長くても数日以内での情報伝達が可能になっていた (Wenzlhuemer 127)。電報は個人や集団が日常的に使用できるまでに普及した最速の通信手段であると同時に、既に世界規模で張り巡らされた電信ネットワークの中にあり、国内および国際的な政治やビジネス、軍事から個人の日常生活に至るまで、電報が様々なレベルでの営みに融け込み、不可欠のものとなっていたのである。

そうした普及状況を映し出しているかのように、『ハワーズ・エンド』では電報の利用が日常化している。電話はまだ一般に普及しておらず、ロンドンのシュレーゲル家にもハワーズ・エンドにも電話がなく電報が使用されたと考えられる (作中での電話への言及は、終盤近く、結婚したヘンリーとマーガレットの新居に電話があることを示す描写一カ所のみである)。簡便な連絡方法として、家族間でもしばしば、時に国境を越えて電報が使われる。ウィルコックス家の次男ポールは後にナイジェリアへ赴任し、家族が結婚するたびに祝電を送ってくるし、ヘンリーとマーガレットの再婚話についてヘンリーの長男の妻からは、ナイジェリアにいるポールに電報で相談することも提案されている。

「1900年までには世界のコミュニケーション空間はほぼ完全に、地理的あるいは航海上のそれとは切り離されていたと言ってよい」 (Wenzlhuemer 28)。それからほぼ10年以内のイギリスを舞台にした本作は、人々が日常レベルにおいても電信によって結びつけられた世界であるといえよう。

人々の日常生活に、こうしたグローバルな通信システムが自明のものとして浸透していたことを示す場面がある。ロンドンの高級レストラン「シンプソズ」でヘンリーとマーガレット、ヘンリーの娘イーヴィーとその婚約者が食事する場面である。大英帝国の歴史を巧みに取り入れたシンプソズの店内で、周囲のテーブルから、店が「帝国のために滋養を与えている客たち」 (“the guests whom it was nourishing for imperial purposes” 149-150) の会話の断片が聞こえてくる。

“Right you are! I’ll cable out to Uganda this evening,” came from the table behind. “Their Emperor wants war; well, let him have it, “ was the opinion of a clergyman. (150)

(「その通りだ! 今夜ウガンダに電報を打つよ」と後ろのテーブルから聞こえた。「やつらの皇帝が戦争をしたいならさせればいい」というのはどこかの牧師の意見だった。)

ここでも、ウガンダに(海外)電報を打つ (“cable out to Uganda”) という一言が、皇帝(おそらくドイツの)に関する意見と併置されている。マーガレット自身は、そのような場面の「不調和」 (“incongruities” 150) を面白がっているだけだが、彼女の日常が電信によって世界と結びつけられた大英帝国のイメージと接していることが、“cable” という動詞によって補強されている。

このように、マーガレットらの生きる社会は電信によるグローバルなネットワークの中に置かれており、彼女自身も日常的にそれを利用している。ただし、そうした「繋がり」の認識はむしろ、遠く離れた場所で起こることの直接的認識そのものではない。フレドリック・ジェイムソンは『ハワーズ・エンド』において北に延びる北国街道やそれと併走する鉄道とともに提示される「無限」

5 Standage 参照。

（“infinity”）を帝国あるいは帝国主義と同一視している。

... colonialism means that a significant structural segment of the economic system as a whole is now located elsewhere, beyond the metropolis, outside of the daily life and existential experience of the home country daily life and existential experience in the metropolis . . . can now no longer be grasped immanently (Jameson 50-51)

（植民地主義は、経済機構全体の中の重要な一部分が、今や他のどこかに、つまりその中心都市〔ロンドン〕を越えた、母国の日常生活や生活に基づいた経験の外に、海の向こうの植民地にあることを意味するからである。【中略】中心都市での日常生活と生活に基づいた経験は…今や内在的に把握することはできない【後略】。）

ジェイムリンはこのように、『ハワーズ・エンド』における帝国主義の描出の不完全さを指摘する。実際、作中でたびたび言及される「帝国」あるいは「帝国主義」はマーガレットにとってイメージしがたいものとして現れ、ウィルコックス氏が海外であくどい商売をして利益をあげたらしいことが仄めかされるのみで、植民地や英国の企業が投機の対象とする非ヨーロッパ地域が直接描かれることはない。マーガレットもヨーロッパ旅行には行くが植民地についての具体的な知識はなく、上の引用場面でも、ウガンダへの電報やドイツ皇帝と戦争の話題が断片的に耳に入る時、マーガレットはその「不調和」を面白がるだけである。

電報によって世界が緊密に結びつけられる一方で、それは植民地主義あるいは帝国支配を促進させ、ジェイムソンの言う「空間的乖離」（“special disjunction” 51）は他者の「内在的」把握を困難にする。翻って、『ハワーズ・エンド』の物語中の人間関係においても、電報を初めとする通信手段は、必ずしも、意思疎通を促進する手段とはなっていないことに注意したい。例えば前節で挙げた騒動のエピソードでは、即時性を主たる特性とする電報が、その特性を発揮できず、必要なタイミングに間に合わなかったために行き違いを生じさせている。すなわち、速やかに情報を伝えて人間関係を円滑にするという、電報に期待された役割が果たされないのである。電気信号そのものは速やかに導線を伝わっていくが、電文の送信には結局人手が関わらざるを得ないのであり、そのため遅延が生む行き違いの滑稽さや軋轢の方がクローズアップされている。

人々は日常的に電報を利用し、国内外に張り巡らされた電信ネットワークは、彼らの生活をグローバルなコミュニケーションシステムの中に位置づけている。だが、そのように緊密になったシステムが、本作においてはむしろ人間同士の意思疎通の難しさを際立たせる役割を担っているのだ。次節では、本作において現れる電報のネガティブなイメージについて、更に詳しく検討する。

3. 「電報と怒り」の数々

冒頭、ポールとの恋を知らせるヘレンの手紙を読み、気が気でないマーガレットの視点で、電報が引き合いに出される。

It was rather difficult. Something must be done about Helen. She must be assured that it is not a criminal offence to love at first sight. A telegram to this effect would be cold and cryptic, a personal visit seemed each moment more impossible. Now the doctor arrived, and said that Tibby was quite bad. (8)

（難しい状況だった。ヘレンについては何かしなければならぬ。一目で恋に落ちて罪に

はならないと安心させてやらなくては。電報で伝えるのは冷淡でぶっきらぼうだが、自分で出かけていくのは、刻一刻、ますます不可能に思われてきた。医者がやって来て、ティビーの具合はとても悪いと言うのだ。）

妹に相思相愛の相手ができただけで、それほど心配するのは大げさではないかという疑問はひとまず措き、ここでは、電報がデリケートな問題を扱うにはふさわしくない「冷淡でぶっきらぼう」なものとされていることを確認しておこう。

続いてハワーズ・エンドで起きた騒動では、ヘレンの電報がマント夫人の出発に間に合わず夫人とチャールズの口論の一因となるだけでなく、電報の送信に手間取る中でヘレンとポールも険悪な雰囲気になる。一方ヘレンの電報を受け取ったマーガレットはすぐにマント夫人の出発を電報でヘレンに知らせ、その電報は迅速に届いてヘレンは夫人の到着を事前に知ることができたが、それも、チャールズと激しく口論しながらハワーズ・エンドに到着した夫人をヘレンが出迎えてポールとの破局を告げ、夫人に更なるショックを与えるという結果を生むにすぎない。この騒動は後日マーガレットによって「電報と怒り」というフレーズに要約される。

この「電報と怒り」のフレーズは、彼女とヘレンとの会話の中でさらに敷衍され、その後も何度か繰り返されることになる。

“... there is a great outer life that you and I have never touched—a life in which telegrams and anger count. Personal relations, that we think supreme, are not supreme there. There love means marriage settlements; death, death duties. So far I’m clear. But here’s my difficulty. This outer life, though obviously horrid, often seems the real one—there’s grit in it. It does breed character. Do personal relations lead to sloppiness in the end?”

“Oh, Meg, that’s what I felt, only not so clearly, when the Wilcoxes were so competent, and seemed to have their hands on all the ropes.”

“Don’t you feel it now?”

“I remember Paul at breakfast,” said Helen quietly. “I shall never forget him. He had nothing to fall back upon. I know that personal relations are the real life, for ever and ever.” (25)

(「…あなたも私も触れたことのない外側の生活がある—電報と怒りが重視される生活が。個人的な関係は、それを私たちは一番のものだと考えているけれど、その外側の生活ではそれは一番ではないの。そこでは愛は夫婦財産契約を意味するし、死は相続税を意味する。そこまでははっきり分かるけれど、難しいのは、この外側の生活は明らかに恐ろしいけれど、それが本物の生活に見えることがよくあるの。そこにはしっかりしたものがあって、それが人格を作るの。個人の関係は結局、ぐちゃぐちゃのぬかるみになってしまうのかしら」

「まあメグ、それが私の感じていたことなの。それほどはっきりとはではないけれど、ウェルコックス家の人たちが有能で、何でも分かっているように見えたから」

「今はそう思わないの?」

「朝食のときのポールを覚えているから」とヘレンは静かに言った。「私はあのときの彼を決して忘れない。彼には何も依って立つものがなかったの。私は、個人の関係が本物の生活なのだということを知っています。この先も永遠に」)

ここでの「電報と怒り」は、愛や死が財産を扱う契約や法律として形をなす「外側の生活」に属し、それらは、内面を重視した個人的な関係と対比されている。ヘレンはあくまで「個人の関係が

本物の生活なのだ」と主張するが、マーガレットはその「外側」の生活を完全に否定しているわけではなく、「それが本物の生活に見えること」もあり、「そこにはしっかりしたものがあ」と感じている。後にウィルコックス家の人々と接したマーガレットは、「彼らを守りたくなつたし、彼女は彼女が苦手とする面に優れているので、彼女を守ってくれることができるだろうと思うこともよくあった。…彼らは、彼女が到達できない生活—『電報と怒り』である外側の生活を送っていた…それを彼女は軽蔑することはできなかった」(“desired to protect them, and often felt that they could protect her, excelling where she was deficient. . . . They led a life that she could not attain to—the outer life of ‘telegrams and anger’ She could not despise it” 101)。そして彼女はヘレンへの手紙で、「見えるもの」(“the seen”)と「見えないもの」(“the unseen”)を「対立させるのではなく…調和させること」(“not to contrast . . . but to reconcile”)が大切だと書く(101-02)。

ここに電報に対する、そして電報の体現する「外側の生活」へのマーガレットのアンビバレントな見方が窺える。そもそも、ヘレンとポールの「電報と怒り」騒動において、電報を利用したのはヘレンとマーガレットであり、二人はその後もしばしば電報を使っている。また、彼らは実業家のウィルコックス家と対比されるが、マーガレットらの精神面を重視した文化的生活は、遺産を株式投資することによって支えられている(姉妹の資産運用については作中で何度か言及されている)。つまり、ウィルコックス家のような実業家が成功し利益を上げることによって、マーガレットらの生活も潤っているのだ。ヘレンとマーガレットの体現する価値観とウィルコックス家の体現する価値観は対立しているように見え、特にヘレンはあくまでもウィルコックス家を批判するが、姉妹自身の生活も電報の支える「外側」の機構に、詳しい知識がないまま、否応なく支えられ組み込まれているのである。マーガレット自身もそのことを意識しており、その一種のバランス感覚ゆえに、彼女はヘンリー・ウィルコックスの中に信頼に足る部分を見出し、その妻ルースの死から数年後に、彼と結婚することになる。

だが、結婚前も結婚後も、マーガレットはヘンリーに対し批判的なまなざしをも持ち続けている。ヘンリーと婚約後、マーガレットは彼の自動車で初めてハワーズ・エンドを訪れる。自動車で移動する間、彼女はそのスピードに不安を感じ、誰かをはねるのではないかと心配するが、ヘンリーは「皆ツバメと電線のように自動車に慣れるでしょう」(“They’ll learn—like the swallows and the telegraph-wires” 195)と意に介さない。ここでも、電信に用いられる電線が野鳥にとっても当たり前存在になっていることが示されるが、作中で土埃を巻き上げながら疾走し、作中でも実際に荷馬車と衝突したり猫をはねたりする自動車はヘンリーや息子チャールズの強引さや功利主義を強調し、電線にとまるツバメがいずれ自動車に慣れるであろう人間の比喩として言及されていること、それに対しマーガレットが納得していないことにも注目すべきであろう。そして彼との結婚を控えたある日、ジャッキー・バストがかつてヘンリーの愛人であったことが(偶然にも)判明し、二人の関係は危機を迎える。マーガレットはヘンリーが先妻ルースを裏切った罪を自覚していないことを鋭く見抜くが、彼を理解し許そうとする。だが、その後ヘレンの失踪を巡る一連の出来事の中で、ヘンリーに対するマーガレットの信頼は大きく揺らぎ、ついに正面から対決することになる。次に、その経過と電報の関わりを辿ってみよう。

ヘレンは音楽会で知り合った貧しい青年レナード・バストに共感し、ヘンリーからの受け売りの情報をヘレンとマーガレットが不用意に知らせたことがきっかけで彼が失業したことから、ヘンリーへの強い反発も相俟ってレナードと衝動的に関係を持つ。その後彼女は姿を消し、約8か月間、マーガレット達から逃げるようにヨーロッパを転々とするが、その間、電報の持つよそよそしさという側面が効果的に用いられている。マント夫人が肺炎になり重体との知らせにもヘレンは素っ気ない電報を寄こすばかりであった。その後おばが回復したことを知ったヘレンから、荷物を

取りに行くという電報が届き、マーガレットはロンドンの銀行で待ち合わせようと電報を打つが、ヘレンは再び行方をくらましてしまう。事情が分からず心配するマーガレットは、既に夫となっているヘンリーに相談し、「ヘレンが本当に生きているようには感じられないのです。あの子の手紙と電報は他の誰かから来たもののようで。あの子の声の中にはないのです」(“I cannot feel that Helen is really alive. Her letters and telegrams seem to have come from someone else. Her voice isn't in them” 284) と訴える。それまで属していた社会から逃れ、親しい人々とのコミュニケーションを避けるヘレンは、手紙や電報という通信システムの背後に姿を隠す。とりわけ肉筆を介さない短い電文のやり取りは、所在の掴めない彼女の存在感の希薄さをさらに強めている。

一方、ヘレンが精神を病んでいるのではないかという妻の危惧を知ったヘンリーは、彼女に嘘の手紙を書かせてヘレンを呼び出そうと計画する。病人保護のためにはいかなる手段も許されるというヘンリーの考えに反発を覚えながらも、マーガレットは結局その計画に同意する。彼女はヘレンを呼び寄せる手紙を出す、実際に彼女と会うまでの連絡には電報がやりとりされる。ここでも、電報は真意を隠すための手段として用いられているが、さらにそれは、マーガレットとヘンリーが積極的にヘレンを欺くための手段でもあった。

これより前、ヘンリーは転居したウィルコックス家に代わってハワーズ・エンドに住んでいた賃借人に苦情を伝える際に電報を用いており、それは彼によれば「かなり手厳しいもの」(“a pretty sharp one” 194) であった。このように電報は、特にヘンリーが関わる時、他者への抗議や、またヘレンに対する例のように他者を欺きコントロールするためにも使用されている。賃借人への苦情やヘレン捕捉の立案が、ヘンリーの経営する「帝国西アフリカゴム会社」(the Imperial and West African Rubber Company) の、アフリカの地図が壁に貼られたオフィスで行なわれるのは象徴的である。「ヘレンを捕まえるために彼〔ヘンリー〕が立てた計画は、巧みでそれ自体は善意のものであったが、その倫理は獲物を追う狼の群れから引き出されていた。【中略】愛想の良い遠慮がちな主人役の姿は消え、代わりに姉弟の目の前に現れたのは、ギリシアやアフリカから金を儲け、現地人たちからジン数本で森林を買い取った男だった」(“the plan that he sketched out for her capture, clever and well-meaning as it was, drew its ethics from the wolf-pack. . . . The genial, tentative host disappeared, and they saw instead the man who had carved money out of Greece and Africa, and bought forests from the natives for a few bottles of gin” 279-80)。電信システムは、大英帝国による植民地支配において「英国による広範囲にわたる領土の掌握を強化するものだった」(Wenzlhuemer 78)。電報が作り出すグローバルなコミュニケーションのイメージはまた、グローバルな戦略と支配のイメージをも支えているのである。ヘレン捕捉計画のエピソードにおいて、電報はより戦略的なニュアンスを帯び、グローバルなレベルでの戦略と支配を反復している。

4. ルースとマーガレット—“transmit”されるハワーズ・エンド

本作において「電報や怒り」に対置される「内面の生活」、「個人的な関係」においては、意思の疎通はどのようになされるのだろうか。

ルース・ウィルコックスは、その生前も死後も、制度化された通信ネットワークの外にいる。ひとつかみの干し草を手にとり静かにハワーズ・エンドの庭に登場し、あっさりとした騒動を鎮めた彼女は、代々土地に根ざして自然の営みとともにあったハワーズ・エンドの歴史の一部として存在し、ウィルコックス家の一員として献身的に家族に尽くしながらも、夫や子供達とは別の行動規範の中に見えるように見える。さらに彼女はマーガレットとは異なり時事問題や新しい思想には特段の関心も意見も表さず「知的ではなく、鋭くもなかったが、それでも偉大さというものを思わせるのは奇妙な

ことだった] (“She was not Intellectual, nor even alert, and it was odd that, all the same, she should give the idea of greatness” 73)。そのような彼女とマーガレットは、ルース51歳、マーガレット29歳という年齢差や趣味・性格の違いを越えて少しずつ親交を深める。「親密というよりもむしろ特異」 (“singular rather than intimate” 78) と形容される二人の交際が、マーガレットの重視する「個人的な関係」に特化したものであることは、ロンドンで二人の交流が始まった際の、やはり通信にまつわるエピソードの中に映し出されている。ハウーズ・エンドでの騒動から数ヶ月後、ロンドンのシュレーゲル家の向かいの高級アパートに、偶然、ウィルコックス一家が転居して来る。マーガレットはヘレンの感情を慮って彼らとの交際を避けようとし、その意思をルースに伝える手紙を取って郵便で送る (“sent this letter round by the post” 64)。なるべくウィルコックス家と距離を取ろうとする意図が明示された方法であるが、それに対してルースからは(おそらく召使の)「手」によって返事が届けられ (“she received the . . . reply by hand” 64)、それを読んだマーガレットは、自分の冷淡な態度がルースを傷つけたことを知り、恥じる。関係修復のために彼女が取った行動は、即座に、ルースのもとに直接出向いて謝ることだった。これを機に、二人は少しずつ親しくなる。二人の交流が、公的な通信制度を介さないところで育まれていったことを、上記のエピソードは示している。さらに付け加えるなら、両者の中で電報が交わされることは作中で一度もない。

ルースの存命中は、「電報と怒り」の世界に対置されるのは、彼女とマーガレットとの直接の対話であった。そしてルースの死後も、二人の「個人的な関係」は、ハウーズ・エンドを介して続くことになるのだが、このマーガレットと亡きルースとの関係には、電信を思わせる一種の「伝達」のイメージが見られる。

ルースの死後に夫ヘンリーへ郵送されてきた彼女の走り書きにはハウーズ・エンドをマーガレットに譲りたいという遺志が述べられていたが、マーガレットはルースの友人に過ぎず、この時点ではまだ、ヘンリーとマーガレットが後に結婚することを誰も予想していない。そのためルースの遺言は、ヘンリーとその子供たちによって無視される。

To them Howards End was a house: they could not know that to her it had been a spirit, for which she sought a spiritual heir. . . . Is it credible that the possessions of the spirit can be bequeathed at all? Has the soul offspring? A wych-elm tree, a vine, a wisp of hay with dew on it—can passion for such things *be transmitted* where there is no bond of blood? (96、イタリック筆者)

(彼らにとってハウーズ・エンドは一つの家屋だった。彼らは、彼女〔ルース〕にとってそれが一つの精神であり、そのために彼女が精神的な後継者を求めたということが分からなかった。【中略】精神の所有権が遺贈されるなどということが信じられるだろうか？魂には子がいるのだろうか？ハルニレの木、ブドウ、露を宿したひとつかみの干し草—そうしたもののへの熱情は、血の繋がりがなくても伝わるのだろうか？) (傍点筆者)

ルースにとってハウーズ・エンドは「一つの精神」であり、それをマーガレットに引き継いでほしいと望んだ。しかしここで語り手は、そのことを知らずハウーズ・エンドを単なる不動産とみなすならば、マーガレットに正当な権利を認めないとしても無理はないと述べる。そのように両方の立場を示した上で、語り手は改めて次のように付け加える—「一つの厳然たる事実が残る。彼らは、ある個人の頼みを見捨てた。その亡くなった女性が彼らに『こうしてください』と言い、彼らは『しない』と答えたのだ」 (“ . . . one hard fact remains. They did neglect a personal appeal. The woman who had died did say to them, “Do this,” and they answered, “We will not” 96-97)。

不動産としてのハワーズ・エンドをマーガレットに遺すことは、ウィルコックス家の人々および「電報と怒り」の世界においては、少なくともこの時点では認められないが、語り手はそれを疑問視する。そしてルースの望み—「精神」としてのハワーズ・エンドの遺贈は、それとは別の形で進んで行く。

上記引用で、精神としてのハワーズ・エンドの継承を示すには“transmit”（伝える・渡す）が用いられている。この動詞“transmit”は、本作の執筆された時期までの用法に限定するならば、何かを別の人・場所・物に伝えること、相続や遺伝によって（通常、無形のものを）伝えること、熱や音、光などを媒体を通じて伝えることを意味する（*Oxford English Dictionary*, “transmit”）。引用箇所「ハルニレの木、ブドウ、露を宿したひとつかみの干し草—そうしたもののへの熱情は、血の繋がりがなくても伝わる（be transmitted）ののだろうか？」という問いで、上記のような有形／無形のものへの伝達／継承という意味を併せ持つ“transmit”が使われていることは示唆的である。物語はその後、この語り手の問いかけを肯定する形で展開する。

さらに、“transmit”に含まれる物理的な意味すなわち何かを媒体として熱や光、音などが伝わるという意味は、電気信号もしくは情報が導線を通して伝達されるという、電信のイメージとも呼応している。電気信号それ自体は目に見えないが、電報というシステムは、空中に張り巡らされた電線（wire）や高くそびえる電信柱、そして駅や郵便局に併設された電報局、紙に書かれて配達される電報という形で可視化されている。水中深く延びる海底ケーブルの先にも同様の設備が存在し、全体がより大きなシステムを成していることを、人々は想像することができただろう。そして電報に先立って確立した郵便というシステムもまた、郵便局や郵便ポスト、切手によってそのネットワークが可視化され、公的に保証された集配システムに支えられている。だがマーガレットとルースとの間では、こうした可視化され公的に確立したネットワークはあまり機能していない。郵便で送られてきたルースの遺言も破棄され、その時点においては、ルースの意思はマーガレットに伝わることはなかった。以後、物語が進む中で、亡きルースの遺志、そして精神としてのハワーズ・エンドは、見えない繋がりによって“transmit”されることになる。

ヘンリーと婚約後、初めて彼とハワーズ・エンドを訪れた際、先に独りで中に入ったマーガレットは、ロンドンから自動車を飛ばしての移動で失われた「空間の感覚」を取り戻す。その時、「家が鳴り響いた」（“the house reverberated” 198）。

“Henry, have you got in?”

But it was the heart of the house beating, faintly at first, then loudly, martially. It dominated the rain. . . . A woman, an old woman, was descending, with figure erect, with face impassive, with lips that parted and said dryly:

“Oh! Well, I took you for Ruth Wilcox.”

Margaret stammered: “I—Mrs. Wilcox—I?”

“In fancy, of course—in fancy. You had her way of walking. Good day.” And the old woman passed out into the rain. (198–99)

（「ヘンリー、来ているの？」）

だが鳴っているのは家の心臓だった。初めは微かに、それから大きく、軍楽隊のように。その音は雨音を凌ぐほどだった。【中略】一人の女、年取った女が二階から降りてきた。背筋を伸ばし、落ち着いた顔で、唇を開き、そっけなく言った—

「おや！あなたをルース・ウィルコックスかと思いましたよ」

マーガレットは口ごもった。「私が—ウィルコックス夫人—私が？」

「そんな気がただけですよ、もちろん—そんな気がね。あの人と同じ歩き方でした。ではさようなら」そう言って年取った女は雨の中へ出ていった。

音はハウーズ・エンドの心臓の拍動のようにマーガレットを包み込む。あたかも家が生き物であるかのように。だが、実際にはそれは、屋内に入り込んでいた近隣の農婦ミス・エイヴェリーの足音であり、彼女はマーガレットとルースが「同じ歩き方」だとして二人を取り違える。亡きルースの後継者として最初にマーガレットが認められるのは、この奇妙な女性の言葉を通してであった。そしてその夜、昼間の出来事に思いを巡らせ、「空間の感覚」を再び取り戻したマーガレットにイギリスへの愛が呼び覚まされる。

She recaptured the sense of space, which is the basis of all earthly beauty, and, starting from Howards End, she attempted to realize England. She failed . . . But an unexpected love of the island awoke in her, *connecting* on this side with the joys of the flesh, on that with the inconceivable. . . It had certainly come *through* the house and old Miss Avery. *Through* them: the notion of “*through*” persisted; her mind trembled towards a conclusion which only the unwise have put into words. (202、イタリック筆者)

(彼女は空間の感覚を取り戻した。それはあらゆる地上の美の基礎であり、ハウーズ・エンドを出発したとき、彼女はイングランドを認識しようと試みた。彼女は失敗した…だがこの島への思いがけない愛が彼女の中に呼び覚まされ、こちら側にある現世的な喜びと、もう一方の側にある捉えがたいものとを結びつけた…それは確かにあの家とエイヴェリーお婆さんを通してやって来たのだ。通して。「通して」という考えが拭えなかった。彼女の心は、賢くない者たちだけが言葉にしてきたある結論に向かって震えた。) (傍点筆者)

ここでマーガレットが感じるのは、ハウーズ・エンドという家やそれがあつた土地への愛のみならず、それらが属する「イギリス」への愛であつた。ドイツ人の父とイギリス人の母を持ち、幼少時から偏狭な愛国心を客観的に観察していたマーガレットは、長くロンドンでコスモポリタ的な都会生活を楽しんできた。そのような彼女が最終的にハウーズ・エンドの後継者となるまでには、作中でたびたび、イングランドを地理的に俯瞰する語りが差し挟まれる。ハウーズ・エンドのあるヒルトンだけでなく、マント夫人の住むスワネージや、ヘンリーとルースの娘イーヴィーの結婚式が行なわれたオニトンについても、ロンドンとの位置関係やその地勢、気候、歴史、景観などが詳しく語られ、しかもそれは、イングランド全体の地理や歴史の中で捉えられている。特にマーガレットが結婚後暮らすつもりでいたオニトンに関しては、語りは彼女の視点からなされ、土地を理解しそこに融け込みたいという彼女の意志を明確に示す。このような過程の中で、ハウーズ・エンドへの愛もイギリスという土地への愛と一体化したものとして現れる。しかし上の引用部分で、繰り返され強調される「～を通して」(“through”) が示すように、ハウーズ・エンドはあくまでも愛を呼び起こす媒体であつて、それが現世的な喜びと捉えがたい何かとを「結びつけ」る(“connecting”)。ここにも電信と共通する伝達のイメージが、神秘的な変奏を加えられて登場している。

ロンドンに戻つたマーガレットはハウーズ・エンドと、その窓から眺めた大きなハルニレの木を幾度となく思い出す。

Their message was not of eternity, but of hope on this side of the grave. As she stood in the one, gazing at the other, truer relationship had gleamed. (203)

(それらの伝えるメッセージは永遠に関するものではなく、墓のこちら側にある希望についてのものだった。彼女が一方「家」の中に立って他方「木」を見つめていた時、より本当の関係がかすかに光を放っていた。)

かすかに光る「より本当の関係」は直接にハワーズ・エンドとハルニレとの関係を指すのか、あるいはそれらを通して示されるものなのか、ここでは明確にされないが、ハワーズ・エンドの窓からハルニレを見つめるマーガレットが家と一体化し、ハルニレとの間に交わされる「墓のこちら側にある希望についての」「メッセージ」を感じ取っていることは明らかである。あたかもハワーズ・エンド（とそこにいるマーガレット）と木の間に見えない導線が張られているかのように。

上の引用箇所後に、ヘンリーとマーガレットがハルニレの樹皮に誰かが昔まじないのために刺した豚の歯を見つけた時のエピソードが加えられている。この歯のことをマーガレットが予め知っていたことに驚いたヘンリーから、誰に聞いたのかと問われた際、彼女は言葉を濁す。実は生前のルースから聞いたのだが、ヘンリーとの会話では互いにルースの名を出すことを避けていたからである。しかし言及されることがなくても、ルースの存在はハワーズ・エンドと分かちがたく結びついている。そして、豚の歯を使った古いまじないの話題がルースを通してマーガレットにもたらされたのであれば、ルースもまた、ハワーズ・エンドの精神を伝える媒体であったと言えないだろうか。さらに、ルースの後を継いで新たな「ウィルコックス夫人」になる（そしてミス・エイヴェリーによってルースと間違われた）マーガレットもまた、媒体としての役割を担うことになる。

オニトンでも土地への愛着を感じていたマーガレットがハワーズ・エンドとの一体感を体験することで、彼女こそハワーズ・エンドを受け継ぐにふさわしい者であることが強調され、時折奇妙なことを口走るエイヴェリー夫人にもなぜかそのことが分かっていた。しかし夫であるヘンリーにはそうした意味でのマーガレットの価値は理解できていない。その点から考えるなら、マーガレットはヘンリーという男性と結婚したというよりもむしろ、亡きルースによって（ひいてはルースの祖先たちによって）ハワーズ・エンドの継承者かつその精神を伝える媒体として「選ばれた」のではないとも言える。ハワーズ・エンド的に「結びつける」には、自身が媒体とならなければならないのだ。

電信は、神経系を電信網のイメージでメタフォリックに表すだけではなく、思考の直接伝達の可能性をも想起させた（Otis 9）。心霊研究者のフレデリック・マイヤーズ（1843-1901）は（無線ではなく有線の）電信のイメージから、意思を離れた所へ伝える「テレパシー」（telepathy）という用語を作り出し（Otis 182）、その概念はその後、無線の開発によって、より盛んに議論されることになる（Otis 186-88）。『ハワーズ・エンド』に描かれるマーガレットとルースとの関係は、決して心霊現象としての「テレパシー」ではない。しかしハワーズ・エンドを介した両者の関係、とりわけ目に見えない「精神」としてのハワーズ・エンドやイギリスへの愛が伝達（transmit）される様を表現するにあたっては、電信のイメージが、より個人的かつ目に見えない形で反復されていると言えるだろう。

5. 「戦う」ハワーズ・エンド

物質主義的な実際家を代表するウィルコックス家に反感を露わにし、あくまで精神性を重んじるヘレンとは異なり、マーガレットはウィルコックス家の実際的な逞しさを評価し「目に見えないもの」と「見えるもの」を調和させることこそ大事だと信じていた。そのようなマーガレットがルースとハワーズ・エンドに惹かれ、この家を次に受け継ぐことになるのは、この継承にこそ異質なも

のを「結びつける」役割が託されていることを示すだろう。

しかし、のどかな田園風景の中でなされるハワーズ・エンド継承の過程には、時に戦いのイメージが見え隠れしながら、「結びつける」力は「電報と怒り」に対抗している。例えば、マーガレットが初めてハワーズ・エンドを訪れた際、鍵を受け取るためにヘンリーがその場を離れた後の場面を見てみよう。

Then the car turned away, and it was as if a curtain had risen. For the second time that day she saw the appearance of the earth. . . . Down by the dell-hole more vivid colours were awakening, and Lent lilies stood sentinel on its margin, or advanced in battalions over the grass. (196-97)

(そして自動車が向きを変えて走り去ると、幕が上がったかのようなだった。この日二度目に、彼女は大地が姿を現すのを見た。【中略】窪みのそばにはもっと鮮やかな色がいくつも見え始めていて、水仙がその縁に歩哨に立ったり、大軍となって草の上を前進したりしていた。)

ヘンリーの自動車が去り、マーガレットが独りになった途端に、この家と「大地」との繋がりが露わになり、草花が、まるで外敵からハワーズ・エンドを守るかのように擬人化されている。

さらにその後、前節でも言及したように、家の二階からミス・エイヴェリーが降りて来る場面でも、その足音は「軍楽隊のよう」(“martially” 198)と形容されている。家の心臓さながらに響くこの足音もまた、ハワーズ・エンドを守る戦いのイメージの中にあると言えよう。周囲から変わり者と見られているミス・エイヴェリーは鍵を預かっているが、ロンドンのシュレーゲル宅が取り壊しになり家財道具がハワーズ・エンドに一時保管されることになると、独断で家具や本を出して家の中に配置してしまう。そのことを知ってマーガレットは独りでハワーズ・エンドを訪ねる。「空間の感覚を失」わせる自動車旅行ではなく、駅から一時間歩いての訪問であることも、彼女がハワーズ・エンドやその土地とより近い関係になることを暗示している。好天の春の日、鳥たちの声や花々に包まれたその家に、シュレーゲル家の家財道具は意外なほど馴染んでおり、ミス・エイヴェリーはマーガレットがまもなくここに住むことになる、と予言めいたことを言う。以前ヘレンが滞在した部屋は子供部屋にしつらえていた。マーガレットは戸惑い反論するが、結局荷物を元に戻すことはできない。ミス・エイヴェリーはマーガレットをルースの後継者とみなし、更にシュレーゲル家の荷物を配置してハワーズ・エンドを姉妹の住処に作り替えることで、いち早く姉妹のハワーズ・エンド継承を準備しているのだ。

マーガレットが三度目にハワーズ・エンドを訪れた時、実際にそこで一種の「戦い」が起きることになる。姿を隠し続けるヘレンを捕まえるため、不本意ながらマーガレットはヘンリーと医師と共にハワーズ・エンドに向かう。ヘレンに精神疾患の徴候がないかと無遠慮な質問をする医師とヘンリーとのやり取りを聞き、マーガレットは「彼女の人間としての権利を否定している」(“deny her human rights” 286)と怒りを感じる。ハワーズ・エンドで再会したヘレンが身籠もっていることが判ると、マーガレットはヘレンを家の中へ入れ、扉を背に、彼女を連れ出そうとする医師とヘンリーに決然として抵抗するのだった。男性たちは諦めてその場を去る。

その後、家の中で姉妹が語り合っていると玄関のベルが鳴る。「きつとウィルコックス家が包圍攻撃を始めたのよ」(“Perhaps the Wilcoxes are beginning the siege” 296)とヘレンが言い、近所の農家の子供(ミス・エイヴェリーの姪の息子)が牛乳を届けに来たと知ったマーガレットが「包圍攻撃じゃないけど、たぶん攻撃に備えて食糧を届けてくれようとしてるのね」(“No, it’s not the

siege, but possibly an attempt to provision us against one” 296) と言う。ここでも戦いにまつわる表現が見られる。ただし、この会話では冗談まじりに使われており、この時点ではまだマーガレットが直接批判した相手は医師だけである。

ヘレンは、未婚の母として生きるためイギリスでの繋がりを断ちドイツへ行くと告げ、せめてその晩を姉とハワーズ・エンドで過ごしたいと言う。マーガレットも同意し、ヘンリーに許可を得て行くが、反対され、夫妻は決定的に衝突する。ヘンリーはかつて自身が先妻ルースを裏切ったにもかかわらず、未婚で妊娠したヘレンを不名誉な存在とみなし、先妻に縁のあるハワーズ・エンドに泊めることを拒否する。彼の言葉に、マーガレットは遂に怒りを露わにする。

You have had a mistress—I forgave you. My sister has a lover—you drive her from the house. Do you see the connection? Stupid, hypocritical, cruel—oh, contemptible!—a man who insults his wife when she’s alive and cants with her memory when she’s dead. . . . You have betrayed Mrs Wilcox, Helen only herself. You remain in society, Helen can’t. You have had only pleasure, she may die. You have the insolence to talk to me of differences, Henry? (305)

(あなたには愛人がいた—私はあなたを許しました。妹には恋人がいる—あなたは彼女を家から追い出すのね。この繋がりが分かりますか？愚かで、偽善者で、残酷で—ああ、見下げ果てた人だわ、妻が活着ている時には辱め、亡くなったら彼女の思い出を信心ぶって持ち出すなんて。【中略】あなたはウィルコックス夫人を裏切ったけれど、ヘレンは自分を裏切っただけ。あなたは社会にいられるのに、ヘレンはいられない。あなたはいい思いをしただけなのに、ヘレンは死ぬかもしれない。それを別々のことだなんて、よくもずうずうしく言えるわね、ヘンリー?)

以前ヘンリーの過去がマーガレットに露見した際には、マーガレットはショックを受けながらも「それは彼女の悲劇ではなかった—ウィルコックス夫人の悲劇だった」(“it was not her tragedy: it was Mrs Wilcox’s” 230) と考え、彼を許した。また、彼が当時の環境を言い訳にしてルースへの裏切りを反省してはいないことを見抜きながらも、彼への愛情ゆえにその時は彼を責めなかった。その彼女が、初めて正面切って彼を糾弾し、「性の二重基準の矛盾を…白日の下に曝してみせる」(武田 205)。ヘンリーが二つの基準を使い分け、そこに「繋がり」(“connection”)を見ようとしなかったことをマーガレットは非難しているのである。彼女は豊かな資産を持つ教養ある女性として自由闊達に暮らし、ヘンリーと結婚後は持論の通り「散文と情熱を結びつけ」るべく、実務的な才覚を持つヘンリーと幸福な家庭を築こうとした。しかし妹の問題で直面した社会の理不尽さとそれを体現するヘンリーの態度を容認することはできなかった。皮肉にも彼女自身にとって、それまでになく生々しい「繋がり(結びつき)」が見えてしまったのはこの時だったのではないか。作中で、彼女がこれほど強い言葉で“connection”について語っている箇所は他にない。ヘンリーと別れることを決意し、彼女はヘレンとハワーズ・エンドで一晩を過ごす。

翌朝、ヘレンとのことで罪悪感に苦しみマーガレットを訪ねて来たレナード・バストと、ハワーズ・エンドに泊まった姉妹に抗議に来たチャールズが鉢合わせし、チャールズに手荒く扱われたレナードが急死したため、状況は一変する。「電報と怒りの時は終わった」(“the time for telegrams and anger was over” 328) と述べられ、チャールズの暴力行為が罪に問われたことで「ヘンリーの要塞は崩れた」(“Henry’s fortress gave way” 332)。マーガレットは途方に暮れるヘンリーと妊婦のヘレンを引き取り、やがて子供が生まれた後もハワーズ・エンドで共に暮らし続ける。事件の翌年、ヘンリーは正式な遺言書を作成し、ハワーズ・エンドをマーガレットに、その後はヘレンとレ

ナード・バストとの間の息子に遺すことが決まる。ルースとマーガレットの間の個人的な“transmission”が法的にも承認を与えられ、マーガレットはハワーズ・エンドという屋敷の継承者、そして精神としてのハワーズ・エンドの媒介者となったのである。ヘレンもヘンリーへの敵意を和らげ、好感を持つようになっていく。農家の子供と遊ぶヘレンの赤ん坊、ヘレンとマーガレット、ヘンリーの和やかで快活な姿を描きつつ、物語は幕を閉じる。

ヘンリーの妻としてのマーガレット、また彼女の妹ヘレンとレナード・バストとの間に生まれた子供がハワーズ・エンドの法的な相続権を得て、ヘンリーと共にそこで暮らすという結末には、ハワーズ・エンドを舞台に、様々な対立や相違が融合し調和した姿を見出すことができよう。だがその結末には疑問も呈されている。デイヴィッド・ロッジは次のように述べる。

Thus Ruth Wilcox's wish is fulfilled, and the possible reconciliation of the divided classes, ideologies and interests displayed in the story is suggested in the hopeful figure of the child and the traditional seasonal activity of hay making, both symbolic of fertility and renewal. This pastoral idyll, of course, hardly constitutes a viable solution for post-industrial society at large, as Forster perhaps acknowledges in the ominous reference to the 'red rust' of housing development only eight meadows distant from Howards End . . . (xix)

(こうしてルース・ウィルコックスの願いは満たされ、物語中で描かれた対立する階級、イデオロギー、関心(利害)が和解する可能性が、子供の希望に満ちた姿と、伝統的な季節行事である干し草作りによって示される。これらはいずれも、豊穡と再生の象徴である。このパストラル(牧歌的・田園詩的)な情景は、もちろん、産業革命後の社会全般で実現可能な解決にはなりそうもない。そのことは恐らく、ハワーズ・エンドから牧草地をたった八つ隔てた所に建つ住宅団地の「赤さび色」に不吉な言及をする時、フォースターも認めているのだ。【後略】)

本節で論じてきたように、ハワーズ・エンドを巡るエピソードではたびたび戦いのイメージが使われている。最終的にウィルコックス家の当主たるヘンリーが「要塞」を失ってマーガレットに庇護されたことを考え合わせるならば、この和やかな結末は、単なる和解・調和ではなく、ハワーズ・エンドの精神を伝える見えない“transmission”が勝ちをおさめたことによる、ハワーズ・エンド邸の更なるパストラル化と言ってもよさそうである。しかしロッジも上で指摘するように、のどかな風景の一部を成しているはずのヘレンとマーガレットが交わす会話によって、それは相対化される。ヘレンは遠くに見える「赤さび色」の住宅群を指して「ロンドンが這い寄ってきている」(“London's creeping” 337)と言い、そうした情景は各地に見られると言って「ロンドンは何か他のものの一部に過ぎないのではないかしら」(“London is only part of something else, I'm afraid” 337)と続ける。ハワーズ・エンドも完全な安全地帯として描かれているわけではない。さらに実業家ウィルコックス家に対し内面の生活を重視するマーガレットとヘレンの生活は、大英帝国の海外投機によって支えられた不労所得であり、それはフォースター自身も含めて、エドワード朝の知識階級の生活の特徴付けるものでもあった(Delany 67-78)。マーガレットの後に彼女の甥が引き継ぐ時に、屋敷がどのような環境の下に置かれることになるのかは不明である。

6. おわりに

『ハワーズ・エンド』で人々は、確立したグローバルな電信網のもとに“connect”されたイギリ

ス社会の中で生きている。そこでは電報は便利な通信手段として機能すると同時に、個人の間での行き違いや対立の媒体ともなり、意思疎通すること、“connect”することの難しさを浮かび上がらせるものとなっている。

これに対し、ルースからマーガレットへのハワーズ・エンド継承を支えるのは、形のない「個人的な関係」に基づく繋がりであり、精神的な“transmission”である。それは、いわばパストラル化された電信のイメージであろう。屋敷としてのハワーズ・エンド、そして生身の人間としてのルースやマーガレットの目に見えない繋がり、彼らが媒体となって、精神としてのハワーズ・エンドを“transmit”する。その“transmission”（継承／伝達）は、様々な偶然が重なってマーガレットがハワーズ・エンドの守り手の座に引き寄せられていく展開のみならず、ハワーズ・エンドを守る者たちとして擬人化された草花や、予言者のようなミス・エイヴェリーなどによって助けられている。この“transmission”（継承／伝達）の物語は、電信で結びつけられた同時代のイギリス社会の中に位置づけられてひそやかに始まり、ロンドンで都会生活を送っていたシュレーゲル姉妹を巻き込んで、イングランドのハーフォードシャー州ヒルトンの外れに位置するハワーズ・エンドの地にパストラルな共同生活をもたらす。それは不可思議な力に助けられながら、見えない「繋がり」に支えられた世界を作り出す、パストラルな物語である。

しかし、それはあくまでも、迫り来るロンドンの遠景とともに提示されることによって、相対化されている。ロンドンで都会生活を謳歌していた姉妹と実業家として成功していたヘンリーは、最終的にロンドンを離れてハワーズ・エンドに定住する。彼らの新生活はロンドンと截然と分たれることで成り立つのだ。また姉妹は、貧しい都市生活者のレナード・バストに歩み寄ろうとするが、彼を救うことはできず、結果的に二人の善意は彼を追い詰めるきっかけとなってしまふ。彼らの階級的隔たりは、農民の祖父母を持つレナードがハワーズ・エンドの次の継承者の父親となることでしか埋められない。他方、マーガレットとヘンリーとの結婚はシュレーゲル家とウィルコックス家の融合を示すかに見えるものの、次にハワーズ・エンドを継ぐのはヘレンとレナードの子供であって、ウィルコックス家の血をひく者ではない。「電報と怒り」が生み出すさまざまな対立や軋轢の「和解」は、見えない“transmission”で繋がったパストラル的世界という形でのみ実現しているのである。本作のエピグラフ“Only connect…”について大石和欣は「歴史的建造物や家を媒介にした過去と現在の人間、階級や民族を超えて継承されていく精神と文化の、不安定で、危険な絆を示唆している」(218)と述べている。結末の和やかさが、そうした不安定さを前提としているとすれば、その「絆」はまた、「パストラル」な物語のゆえに保たれていることになるだろう。そしてその物語は「結びつける」ことを求めつつも、「電報と怒り」の世界をなぞるかのよう、戦いのイメージを含みこまずにはおかない。

前節で引用したロッジが「豊穡と再生の象徴」と指摘する干し草作りは、最終章の冒頭において、明確に聖なるものと結びつけられる。トム（ミス・エイヴェリーの姪の息子）の父親である農夫が、まるでその地を守るまじないのように、「牧草地の聖なる中心を囲むように次第に輪を狭めながら」（“encompassing with narrowing circles the sacred centre of the field” 333）草を刈る姿が描かれるのである。この草刈りはまた、ハワーズ・エンドの継承者となれるか否かを示すものでもある。生前のルースが干し草を手にて庭を歩き、最終章ではヘレンの子供が干し草の山の上で遊ぶのに対し、ヘンリーと彼の子供達はみな、干し草アレルギーで外に出られない。ハワーズ・エンドは、チャールズが屋敷の相続権を失い、ヘンリーが武装を解いた後もなお、彼らの力を拒み続けているようだ。

『ハワーズ・エンド』の結末のはらむ不安定さは、同時代の社会を活写する小説でありながら同時にその中にパストラルな「伝達／継承」の物語を組み込むという、本作の構造そのものから必然

的に生み出されている。そのパストラルな物語は、「電報と怒り」に抵抗しながら、電信ネットワークに繋がれた同時代のイギリス風景の中に併存し続けているのである。

引用文献

- Delany, Paul. “‘Islands of Money’ : Rentier Culture in *Howards End*.” *E.M. Forster*. Ed. Jeremy Tandler. New Casebooks. New York: St. Martin’s Press, 1995. 67–80.
- Forster, E.M. *Howards End*. The Abinger Edition of E.M. Forster 4. London: Edward Arnold, 1973.
- . “The Machine Stops.” *The Eternal Moment and other Stories*. By E.M. Forster. London: Sidgwick & Jackson, 1928. 1–61.
- Jameson, Fredric. “Modernism and Imperialism.” *Nationalism, Colonialism, and Literature*. By Terry Eagleton et al. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990. 43–66.
- Lodge, David. “Introduction.” *Howards End*. By E.M. Forster. New York: Penguin Books, 2000.
- Otis, Laura. *Networking: Communicating with Bodies and Machines in the Nineteenth Century*. Ann Arbor: The U of Michigan P, 2011.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Stallybrass, Oliver. *The Manuscript of Howards End*. The Abinger Edition of E.M. Forster 4a. London: Edward Arnold, 1973.
- . “Editor’s Introduction.” *Howards End*. By E.M. Forster. The Abinger Edition of E.M. Forster 4. London: Edward Arnold, 1973.
- Standage, Tom. *The Victorian Internet: The Remarkable Story of the Telegraph and the Nineteenth Century’s On-line Pioneers*. New York: Bloomsbury, 2014.
- Wenzlhuemer, Roland. *Connecting the Nineteenth-Century World: The Telegraph and Globalization*. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- 大石和欣『家のイングランド』名古屋大学出版会, 2019年.
- 河野真太郎『〈田舎と都会〉の系譜学』ミネルヴァ書房, 2013年.
- 武田美保子『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』彩流社, 2003年.